

お茶の水女子大学附属幼稚園

保育の研究

第 3 卷

保育カンファレンスの検討Ⅲ

— 保育者の連携を手がかりにして考える —

平成 10 年度

お茶の水女子大学附属幼稚園

幼児教育研究会

はじめに

園長 黒田 淑子

本園は、120年余の保育の歴史を継承しつつ、日々の活動を、主体的に、創造的に展開してきており、このたび、『保育の研究』第3巻が刊行されることになった。大学における附属校園のありかたや幼稚園教育の動向とも対応させながら、毎年、実践研究の成果をまとめていくことは意義のあることである。これは園内で継続的に行われている保育カンファレンスを基盤として、実践と研究と養成を相即的に行うことのできる状況が整ってきたことの証ともなっている。

今年度の研究は、初年度のカンファレンス全体の経緯に関する研究、および昨年度の、ひとりの保育者の変容に関する研究に続くものであり、保育者の連携を手がかりにして、まさに保育の研究の発展のありかたを如実に示しているものである。保育者間の「連携」に関して言えば、担任の立場、フリーの保育者の立場、他のクラスの保育者の立場という、それぞれの立場をいかした三者関係的・相互媒介的な連携のありかたが提示されており、「考察」で挙げてある八つの変化は、実践にかかわっている研究者ならではの特色のある考察となっている。そして「カンファレンスが果してきた役割」として、本園の保育カンファレンスの意味が、また新たな角度から明らかになっている。

この研究で述べられていることは、「私たち」を超えて、普遍的な保育の理念・方法に通じるものが含まれているのではないかと考える。人間関係の視点にたつて言えば、「保育に関する共通認識」をもとに、保育者間の人間関係を豊かにダイナミックに構築していくことは、個々の保育者がそれぞれ主体的に保育していけることにつながっており、日常の保育の問題にチームで取り組むことをも可能にし、保育者と子どもの関係、子どもたちの関係など、保育をめぐる人間関係が柔軟に、重層的に発展していく契機となっていくのである。

『保育の研究』は、本園での保育の実践および保育カンファレンスのまとめであるが、今後、その成果を、内外の保育の実践研究にいかせるような普遍的なものとして明文化していくことも必要になってくるのではないだろうか。附属校園の存在意義や保育界の諸課題とも関連させながら、本園ならでの保育カンファレンスが続けられ、さらに研究が充実発展していくことを願ってやまない。

目 次

はじめに	3
I. 研究の内容	5
1. 本年度の研究について	5
2. 保育カンファレンスの検討（Ⅲ）	7
— 保育者の連携を手がかりにして考える —	
〔1〕はじめに	7
〔2〕S夫の保育の連携事例	8
〔3〕私たちの保育の変化	10
〔4〕カンファレンスが果たしてきた役割	16
〔5〕おわりに	18
3. カンファレンスの実践例	20
〔1〕1997年10月15日のカンファレンスの概要	20
〔2〕1997年10月22日のカンファレンスの概要	34
〔3〕1997年11月26日のカンファレンスの概要	44
〔4〕1997年12月10日のカンファレンスの概要	57
II. 資 料	78
1. S夫の担任の記録から	78
2. フリーの保育者の記録から	81
3. 他のクラスの保育者の記録から	83
4. 具体的な連携の事例（1997年10月13日）	86
III. 実践者の感想	88
あとがき	100

I. 研究の内容

1. 本年度の研究について

榎田正子

本園では、1994年以来保育の実践研究として、保育カンファレンスを継続してきた。ここで言う保育カンファレンスとは、本園の保育にかかわりを持つ保育者と研究者が、定期的に参加して行う保育に関する話し合いであり、話題や話し合いの進め方、特徴等は、既報で詳述したところである。日々の保育実践と並行してカンファレンスを実施し、その内容を種々の側面から検討することによって、カンファレンスが保育実践に対してどのような意義を持つのかを探り、同時に、日々の保育実践をより一層深めることにつなげたいと考えてきた。

本年度の研究は、「この頃私たちの保育が何となく変わってきたような気がしない？」というところから始まった。「自分らしく保育ができていく感じ」「お互い同士もスムーズ」「自分のクラスとか誰のクラスの子もとかにとらわれていない」「いつでもどこでも保育の話ができるし、やっている」等々、表現は様々ながら、それぞれ実践者として確かに以前とは違う保育の感覚があり、さらに、その変化の背景にはカンファレンスの継続があるという、確信に近い思いが皆にあった。また日常の保育者同士の対話の中でも、互いの支え合いや自己の保育の洞察、新たな気づ

きなどを体験できる場合が多くなり、カンファレンスの機能が幼稚園の生活全体に拡大したような印象もあった。それならば、継続してきたカンファレンスは我々をどのように変え、さらに我々を通して日々の保育実践にどのような変化をもたらしているのか、すなわち、カンファレンスは我々の保育にどのような形で生かされていると言えるのだろうか。これらを探ることを目指すところとして、「保育者間の連携」という視点から現時点での我々の保育を見つめたのが、本年度の研究である。

出発点となった「何となく」「～の感じ」等の感覚は、その表現のあいまいさから一般的には研究にそぐわないもののようにとらえがちであるが、日々の実践においてはごく自然で現実的な感覚である。我々は、4年前にカンファレンスへの取り組みと共にこの一連の研究を開始したとき以来、実践者として取り組む実践研究であるからこそ、保育者としての主観や率直な感覚を見逃さず丁寧に扱っていきたいと考えてきた。今回もこの姿勢を持ち続けつつも、同時にそれによって、研究が自分たちだけの独りよがりのものにならないような配慮もしたつもりである。

今年度の研究が既報の第1巻、第2巻と異

なところは、これまでの二つの研究が、保育実践と並行して継続するカンファレンスの流れ（経過）に沿ってその中で変わっていくものをとらえようとしたのに対して、今回は、カンファレンスの流れの中に身を置きながら、並行する保育実践の現時点を横断面としてそこに変化したものを見つけ、カンファレンスとの関係を考えようとした研究の方法論にあると言える。これはひとつの試みである。経過しているものの変化を見ようとする時、縦

断的方法と横断的方法が考えられるのは周知の通りであるが、数年後のある時点での保育実践を今回と同様の「保育者の連携」を視点として眺めた場合には、今とはまた違う連携のありようが見えるかもしれないし、カンファレンスが果たす役割も、よりはっきりとした形を表すかもしれないとも考えられるのである。このような意味において、今年度の研究もまた、将来につながる一段階の研究として位置づけられることを願っている。



あ と が き

田 中 三保子

保育が終わると、掃除をしながら、教材準備をしながら、お茶を飲みながら、「きょう、Aちゃんがね」と、子どもの話がすぐに始まる。保育の中で自分が出会った他のクラスの子どもについて、担任に伝えるための話である。担任から求められているわけでも、義務感からというわけでもなく、ごく自然にそうなる。そしてそういう話から、担任は子どもたちのその日の行動の流れや様子を的確に把握でき、また子どもそれぞれの別の一面を知ることができる。

四年前、保育について本音で語り合えるようになることを願って、私たちの保育カンファレンスは始められた。それ以来、それぞれの保育者が自分の課題を見つけ、課題の一つ一つをみんなで丁寧に考えていくかたちで、カンファレンスが続けてきた。研究も、カンファレンスを重ねるうちにみえてくる問題にテーマをを絞り、発表するかたちをとってきている。今回の「保育者の連携」というテーマも、そういった経緯の中から浮かびあがってきたものである。

子どもの心が見えにくくなったと言われる。教育の現場にいとそういう実感は確かにある。だからこそ余計に、一人ひとりの心に寄り添った保育をしたいと願う。そのために、できればクラスの定員をもう少し減らしてもらいたいものである。一人ずつにかけられる物理的な時間が増えれば、それだけでも心が見えかたは違ってくるはずである。そういう意味で、チームティーチングも子どもの心に寄り添うための一つの方法であろう。そして、チームティーチングが有効に機能するには、保育者間の連携の在り方が問われることになる。

私たち自身が、連携して保育にあたれるようになったという自覚をもてるようになったのは、この研究を通してである。継続的なカンファレンスの結果として、保育者一人ひとりが主体的に自分の保育を進められるようになり、自然に連携して保育していることに気づき、さらに、積極的に連携していこうとする姿勢が生まれてきたところである。私たちの「連携」はまだ始まったばかりであり、問題点もまだよく見えてない状況でもある。これからも私たちは、一人ひとりが自分の保育を探っていきながら、連携についても考察を重ねていきたいと考えている。そして、そこから、よりよいチームティーチングに寄与できる知見を得られたらと願っている。

研 究 同 人

園 長	黒 田 淑 子
副 園 長	榊 田 正 子
	田 中 三保子
	吉 岡 晶 子
	伊集院 理 子
	上坂元 絵 里
	高 橋 陽 子
	佐 藤 寛 子
	岩 間 里 香
本 学 教 官	田 代 和 美

お茶の水女子大学附属幼稚園
保育の研究
第 3 卷

平成10年12月20日発行

発 行 お茶の水女子大学附属幼稚園
幼児教育研究会

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
TEL. 03-5978-5881
FAX. 03-5978-5882

印 刷 田畑謄写堂

〒112-0012 東京都文京区大塚3-6-6-201
TEL. 03-3941-1329